# 金井保三著『日語指南』の文法学習項目

吉　岡　英　幸

キーワード
明治期・金井保三・『日語指南』・『甲種日語読本』・文法学習項目

## 1. はじめに

筆者は，吉岡 2000 で，明治期に作成された約 100 種の日本語教材の内容・構成を分析し，使用目的別に文典型教材，語法型教材，読解教材，会話教材，文字教材の五つに分類できること，そのうち文型的な学習項目を中心に構成されている語法型教材——語法総合教材と語法用例教材の 2 種類に分けられる——が 3 割を占めることを明らかにした。また，吉岡 1999 では，教師が教室で 4 技能を並行して指導することを前提として作成された語法総合教材のうち，台湾総督府民政部学務課『台湾適用会話入門』，泰東同文局『東語初階』，振武学校『日本言文課本首巻』，宏文学院『日本語教科書第 1 巻』，萩原敬之『法政大学日語読本入門』，経緯学堂『甲種日語読本巻 1』の 6 種の文法学習項目を，現代の初級教科書の文型などをもとにして決められた日本語能力試験シラバスの 4 級，3 級の文法学習項目と比べ，どのぐらい重なりがあるか調査した。その結果『日本語教科書第 1 巻』と『甲種日語読本巻 1』は 7 割以上が重なり，明治期「文型」という語彙はまだ使用されていないものの，一部の人々には既にそれが日本語習得に有効な文法学習項目として把握され，文型中心の日本語教材が明治期から作成されていたことを論述した。

本稿は，現代の初級文法学習項目が 78% も採られ，6 種の教材の中で

最もバランスよく，多くの初級文法学習項目が配されていた『甲種日語読本巻1』の中心作成者であった金井保三が，単独で作成した中国人のための日本語教材『日語指南』の文法学習項目を調査し，その教材の特色と金井保三の日本語教育観を明らかにすることが目的である。

## 2. 金井保三と『日語指南』

金井保三の履歴についてはまだわからないことが多いが，諸星 2000 によると，1871 年(明治 4) 10 月 24 日，水野家の御典医金井元貞の子として長野県に生まれる。中国に長く滞在していたようであるが，詳細は不明である。独協中学では国語を教えたが，東京帝国大学の上田万年に師事し，上田が校長を務めた東京高等商業学校付属外国語学校や，拓殖大学の前身台湾協会専門学校では中国語の教師をしていた。1917 年(大正 6) 1 月 7 日療養中の軽井沢で病没，享年 47 歳であった。吉岡 1994 で触れたように，金井は 1891 年(明治 24) に早稲田大学の前身，東京専門学校英語政治科 2 年級に在籍していたが，卒業はしなかった[1]。彼の著書『日本俗語文典』(明治 34 年 7 月，宝永館書店) の「はしがき」によると，1897 年(明治 30) 2 月から日本語を学ぶために来日した中国政府派遣留学生に対し日本語教育を行ったというが，それがどこかを特定する資料はまだ見つかっていない。『日本俗語文典』はそのときの経験から生まれたもので，留学生と日本人に日本語についての広い知識を与えるために書かれたものである。小川 1989 では，成田山資料館の保存資料のメモに，1901 年(明治 34) 開設されたばかりの東亜商業学校の日本語講師の中に金井保三の名前があることを紹介しているが[2]，筆者が調査した東京都公文書館の記録によると，1907 年(明治 40) の東亜商業学校学則には中国語の担当者とし

1) 吉岡英幸 [1994]「早稲田大学清国留学生部——そのカリキュラムと日本語教師——」『講座日本語教育』第 29 分冊，pp. 101～102 参照。

2) 小川博 [1989]「柏原文太郎と中島裁之——中国留日学生史の一齣」『社会科学討究』101，p. 5.

て金井保三の名前が報告されている[3]。

経緯学堂は，中国・韓国の留学生を対象とする予備教育機関として，明治大学により 1904 年(明治 37)8 月に創設された。修業年限 2 年の普通科と，1 年の高等科，それに 1 年以内の別科も設置された。日本語の授業時数は普通科の場合，1 学年は「読方，会話，文法」が 1 学期 24 時間，2 学期 17 時間，3 学期 16 時間であり，2 学年は同科目が 1 学期 13 時間，2 学期 12 時間，3 学期「講読，会話，文法，作文」12 時間となっていた。高等科の場合は，「講読，会話，文法，作文」が各学期とも 10 時間であった[4]。『成立期明治大学関係者略伝』によると，9 月の開校時の日本語担当教師は，内海弘蔵，本庄季彦(立教中学講師)，堀江秀雄(開成中学講師)の 3 名であったが，一月遅れの 10 月の就任として「経緯学堂講師，日語　金井保三」と記載されている。肩書きは「東京帝国大学講師，第一高等学校講師」となっている[5]。この略伝には就任年次は記してあっても退任の記録がないため，金井がいつまで経緯学堂で日本語を教えたかは定かではない。1907 年(明治 40)7 月刊行の経緯学堂編『甲種日語読本巻 1』は，金井が富田才次と共に作成したものを協議会に出して，上田万年，芳賀矢一，経緯学堂の評議員である金沢庄三郎の 3 博士に審査訂正を受けて完成させたことを，編纂の主旨の中で金井自身が記しているが，少なくともこの時期までは在職していたと考えられる。富田才次は 1907 年(明治 40)5 月に日本語担当として経緯学堂に就任している。金井は 1905 年(明治 38)9 月から翌年 8 月の 1 年間，早稲田大学清国留学生部でも日本語を担当したが，同時期に東京帝国大学国文科を前年卒業したばかりの富

3)　東亜商業学校 (M41) 628.C6.02 の商業学校規程に基づく設置変更願。開校時科目にあった日本語がなくなり，新たに英語などが加わった。

4)　明治大学広報課歴史編纂資料室 [1977]『歴史編纂資料室報告第 9 集　資料明治大学教育制度発達史稿 2』，pp. 136～139.

5)　明治大学広報課歴史編纂資料室 [1974]『歴史編纂資料室報告第 6 集　成立期明治大学関係者略伝』，pp. 13～14.

田才次も日本語を担当した[6]。この縁で金井の紹介により経緯学堂で教えるようになったものであろう。『甲種日語読本巻1』は金井と富田が原案を作成したことになっているが，日本語教育のキャリアから見て，金井が中心となって作成されたとみて間違いあるまい。

『日語指南』は2巻で構成されており，『日語指南壱』は1904年(明治37)3月，発行者は柏原文太郎，『日語指南弐』は1905年(明治38)11月，発行者は高田俊雄で，ともに「早稲田大学出版部蔵版，丁酉社」となっている[7]。『日語指南壱』は全体が第1から第34までの34(以後これを便宜的に課と呼ぶことにする)に分かれており，1課が日本語と中国語の違いについて，2課から14課までは発音と文字表記について，15課が数・助数詞など，16・17課が「こ・そ・あ・ど」や人称代名詞，18から34課までは，それぞれ助詞「と，は，が，へ，に，を，で，まで・から，で，より，に，も，と，に」を中心に各分野の語彙を配して，日本語の用例文とその中国語訳，課によっては中国語での解説があり，各課の後ろに練習として中国語の例文，という構成となっている。『日語指南弐』は全体が38課に分かれており，「ばかり・ほど・くらい，あまり・たらず，名状詞(形容詞，形容動詞)，もう・もっと，あまり～ない，～すぎる，四段変化動詞，て・た，上一段変化動詞，下一段変化動詞，変格動詞，ます・です，～ことは～が，～ば～ほど，ばかり・だけ・しか～ぬ，て，～てはいけませぬ・にはおよびませぬ，なければならぬ，なければ～ぬ，～よい・にくい，まい，てごらん・てみよう，だす・はじめる・てしまう，ちがえる・あきる・なれる，たい・たがる，と，もし～なら，～ことができる，～かた，けれども，そう(様態・伝聞)，～かもしれぬ」を学習項目とし

6) 前掲1)，p. 98.

7) 柏原文太郎は1889年(明治22)東京専門学校普通科に入学して翌年卒業，同年英語政治科に再入学し1893年(明治26)卒業した。同時期同校に在籍した金井と面識があったと思われる。高田俊雄は早稲田大学総長を務めた高田早苗の弟で，1893年(明治27)東京専門学校が行っていた通信教育である講義録編集室の一員になり，出版事業に携わる。

て，各用例文とその中国語訳，練習で構成されている。『日語指南』は，実用的日本語を習得するために選択された文型などの学習項目・語法を中心に構成された語法型教材であり，さらにその中の語法用例教材に分類される教材である[8]。

### 3. 『日語指南』の文法学習項目

『日語指南』において金井の意図した文法学習項目の中心は，各課の見出し項目がそれに当たるであろうが，課の数は限られており，他の重要な語彙や文型は当然関連する各課の用例語句や用例文に組み込んであると考えられる。金井がどのような文法学習項目を選択したかを見るためには，それらの用例語句や用例文を対象に基本的文法学習項目がどのぐらい採られているかの調査を行う必要がある。現代，基本的文法学習項目として一般に広く利用されているのは日本語能力試験のシラバスであり，初級終了レベルの3級と初級半ば程度のレベルである4級の「文法」項目が『日語指南』にどのくらい採られているかを調べたものが以下の表である[9]。表の数字は課を示すが，イタリックの数字は『日語指南弐』の課を表す。また＊は『甲種日語読本巻1』に採られている項目であることを示す。

1) 4級の文型

A. 文法事項

A-I 文型，活用等

| 文法項目 | 課 | 文法項目 | 課 |
|---|---|---|---|
| 「は」＋疑問詞 | 16* | 疑問詞＋「が」 | 22* |
| 形容詞の現在・過去・否定 | 21* | 形容詞のテ形　Aくて | *3** |
| 形容詞の連用形＋動詞 | 21* | 形容詞＋名詞　A＋N | 21* |

8) 吉岡英幸 [2000]「明治期の日本語教材」『日本語教育史論考——木村宗男先生米寿記念論集』参照。

9) 国際交流基金，日本国際教育協会編 [1994]『日本語能力試験出題基準』による。

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| 形容詞＋の　Aの | *3** | 形容動詞　現在・過去・否定 | 21* |
| 形容動詞のテ形　ANで | * | 形容動詞の連用形＋動詞 | 29* |
| 形容動詞＋名詞　ANな＋N | *5** | 形容動詞＋の　ANなの | * |
| 存在文　NにNがある/いる | 24* | 存在文　NにNがQある/いる | * |
| 所在文　NはNにある/いる | 24 | 動詞　現在・過去・否定形 | 16* |
| 動詞の自他　NがV/NをV | | 動詞のテ形　Vて | *19** |
| 動詞のテアル形　Vてある | 20* | 動詞のテイル形　Vている | 24* |
| 動詞のナイデ形　Vないで | | 名詞述語　現在・過去・否定 | 17* |
| 名詞述語文のテ形　Nで | 21* | 名詞＋の＋名詞　NのN | 16* |
| 名詞＋のだ　私のだ | * | 連体修飾＋名詞　買った本 | 22* |

A-II　助詞，指示語，疑問詞等

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| 疑問詞　何 | 16* | 疑問詞　だれ / どなた | 17* |
| 疑問詞　いつ | 16* | 疑問詞　いくつ | 18* |
| 疑問詞　いくら | 16* | 疑問詞　どこ | 20* |
| 疑問詞　どれ | 16* | 疑問詞　どう | *10** |
| 疑問詞　どんな | 18* | 疑問詞　どのぐらい | 28 |
| 疑問詞　なぜ / どうして | *5** | 疑問詞＋か　何か | 28* |
| 疑問詞＋も＋否定　何も | 32* | これ，それ，あれ | 16* |
| この，その，あの | 16* | ここ，そこ，あそこ | 24* |
| こちら，そちら，あちら | 23* | が　友達が来た(主語) | 22* |
| を　私はパンを食べる(目的語) | 18* | を　家を出る(起点等＋を) | 26* |
| に　ここに本がある(場所) | 24* | に　バスに乗る(到達点) | 19* |
| に　7時に起きる(時間) | * | に　本を買いに行く(目的) | 34* |

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| に　1日に3回行く(回数) | *1* | で　公園で野球をする(場所) | 26* |
| で　バスで行く(手段方法) | 29* | で　木で机を作る(材料) | 29* |
| で　病気で学校を休む(理由) | *14* | で　全部で百円(数量) | 18* |
| へ　東京へ行く(方向) | 23* | と　本とノート | 18* |
| と　妹と(いっしょに) | 18* | と　友達と会う(動作の相手) | 18* |
| から，まで(場所) | 28* | から，まで(時間) | 28* |
| や　切手やはがき | * | は　私は学生だ | 17* |
| は　テニスは外でする(目的語) | 22* | は　酒は飲まない(否定と) | 21* |
| は　私は行くが，兄は行かない(対比) | 22* | も　私は行く。兄も行く | 32* |
| も　本もノートもある | 32* | 格助詞＋は / も　には，へも | 21* |
| か　本かノート | *1** | か　行くか行かないか | *25** |
| など　本やノートなど | * | ぐらい　30人ぐらい | *1* |
| だけ　果物だけ食べた | *18* | しか　果物しか食べない | *18* |
| て　本を読んで寝る(単純接続) | 22* | て　歩いて帰る(副詞的，方法) | *11** |
| て　風邪をひいて休む(理由) | 18* | が　すいませんが，本を～ | *1** |
| か　これはあなたの本ですか | 16* | か　先生ですか，学生ですか | * |
| ね　今日はいい天気ですね | 27* | よ　その本はいいですよ | 25 |
| わ　私もいくわ | | 中　1年中暑い | *12* |
| たち / ども / 方　私たち | 17* | あまり～ない　あまり見ない | *7* |
| 1～10000 / 一つ(数) | 15* | 枚 / 冊 / 本等(助数詞) | 15* |
| ～月 / ～日 / ～曜日 | 15* | ～時～分(時刻) | 15* |
| ～時間 / ～分間(時間) | 15 | | |

B.　表現意図等

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| 依頼　N を下さい | * | 依頼　～て下さい | 23* |
| 依頼　～ないで下さい | | 依頼　V て下さいませんか | |
| 勧誘　V ましょう | 25 | 勧誘　V ませんか | |
| 希望　N がほしい | 34* | 希望　V たい | 28* |
| 逆説　～が | 17* | 同時　V 時 | 20* |
| 同時　V ながら | * | 前後　V てから | * |
| 前後　V た後(で) | * | 前後　V 前(に) | * |
| 推量　でしょう / だろう | 1* | 並立　V たり V たり | 29* |
| 変化 A く / AN に / N になる | 31* | 変化　A く / AN / N にする | 5* |
| 変化　もう＋肯定 / 否定 | 6* | 変化　まだ＋肯定 / 否定 | 22* |
| 名称の導入　～という N | 13* | 理由　～から | 2* |

2)　3 級の文型

A.　文法事項

A-I　文型，活用

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| 受身　V(ら)れる | 31* | 敬語　お V になる | * |
| 敬語　V(ら)れる | | 敬語　お N | * |
| 敬語　お V する | * | 敬語　お V いたす | 13* |
| 敬語　(お) A ございます | 30* | 敬語　AN/N でございます | * |
| 使役　V(さ)せる | 31* | 使役＋受身　V(さ)せられる | * |
| ～ずに　V ず(に) | * | 文の名詞化　～の | 17* |
| 文の名詞化　～こと | | 文の名詞化　～ということ | 20 |
| 補助動詞　V ていく / くる | 17* | 補助動詞　V てみる | 25* |
| 補助動詞　V てしまう | 26* | 補助動詞　V ておく | 5* |

A-II　助詞，指示語等

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| こんな，そんな，あんな | 24* | こう，そう，ああ | * |
| 縮約形　～ちゃ | | までに　9時までに | * |
| も　50万円も持っている | * | ばかり　テレビばかり見て | 18* |
| でも　お茶でも飲もう(例示) | * | 疑問詞＋でも　何でも | 8* |
| とか　本とかノートとか | * | し　頭もいいし体も丈夫 | 4* |
| の　いっしょに行くの | | だい　どうしたんだい | |
| かい　いっしょに行くかい | | A さ / AN さ　暑さ | 2 |
| らしい　男らしい人 | | A がる / AN がる　暑がる | 3* |

B.　表現意図

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| 意志　V(よ)うと思う | 20* | 意志　～つもりだ | 17* |
| 意志　V(よ)うとする | * | 意志　V ことにする | |
| 意志　N にする | | 依頼　お V ください | |
| 依頼　(さ)せてください | | 引用　～と言う | 19* |
| 開始　V はじめる | | 開始　V だす | 10* |
| 過度　V すぎる | 8 | 可能　V ことができる | 31* |
| 可能　V(ら)れる | 1* | 勧告　～ほうがいい | 17* |
| 希望　V たがる | 28* | 義務　～なければならない | 21* |
| 逆説　～のに | * | 許可　～て(も)いい | 8* |
| 禁止　～てはいけない | 3 | 禁止　～な | 22 |
| 経験　V たことがある | 10* | 継続　V 続ける | |
| 終了　V 終わる | | 受給　あげる/もらう/くれる | 31* |
| 受給　～てあげる / もらう / くれる | 2* | 受給　さしあげる / いただく / 下さる | 3 |

| 文　法　項　目 | 課 | 文　法　項　目 | 課 |
|---|---|---|---|
| 受給　～てさしあげる / いただく / 下さる | | 条件　～ば | 20* |
| 条件　～たら | 6* | 条件　～なら | 30* |
| 条件　～と | 29* | 状態放置　～まま | 11* |
| 譲歩　～ても / でも | 6* | 疑問詞＋ても / でも | 12* |
| 推量　～と思う | 1* | 推量　～らしい | |
| 推量　～かもしれない | 38* | 推量　～はずだ / はずがない | * |
| 推量　～ようだ | 4* | 伝聞　～そうだ | 35* |
| 難易　V やすい / よい | 23* | 難易　V にくい | 23 |
| 比較　～は～より | 30* | 比較　～と～とどちら / ほう | 32 |
| 比較　～ほど～ない | * | 比喩　～よう(な) | * |
| 不必要　～なくてもいい | | 方法　～かた | 32 |
| 命令　V 命令形 | 25* | 命令　V なさい | 18* |
| 目的　V ため(に) | * | 様態　～そう | 34* |
| 理由　～ので | * | 理由　～ため(に) | * |
| ～は～が　私は犬が好きだ | 5* | ～は～が　象は鼻が長い | * |
| ～がする　音 / においがする | 12* | V ことがある　休むこと～ | * |
| V ことになる　話すことになる | | ～のだ　学校へ行ったのだ | 17* |
| 疑問詞＋～か　だれが来たか | 16* | ～かどうか　来たかどうか | 25 |
| ～ように言う | * | ～ようにする | 22 |
| ～ようになる | * | V ところだ　行くところだ | 14* |

上記の文法学習項目をまとめると次の表のようになる。

| | 4 級 | 3 級 | 計 | AI | AII | 小計 | B |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 項目数 | 115 | 100 | 215 | 44 | 83 | 127 | 88 |
| 日語指南 | 96 (83%) | 59 (59%) | 155 (72%) | 30 (68%) | 68 (82%) | 98 (77%) | 57 (65%) |
| 甲種日語読本 | 97 (84%) | 71 (71%) | 168 (78%) | 38 (86%) | 66 (80%) | 104 (82%) | 64 (73%) |

『日語指南壱』と『日語指南弐』の文法学習項目の配分を見ると，次のようになる。

| 級 | 4 級 | | | | 3 級 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 分類 | AI | AII | B | 計 | AI | AII | B | 計 |
| 壱 | 16 | 49 | 5 | 70 | 5 | 1 | 11 | 17 |
| 弐 | 4 | 13 | 9 | 26 | 5 | 5 | 32 | 42 |
| 計 | 20 | 62 | 14 | 96 | 10 | 6 | 43 | 59 |

これを見ると，より基本的である4級の項目では壱の70に対し，弐が26，より進んだ段階の3級では壱の17に対し弐の42となっている。4級の表現意図のBのみ壱より弐のほうが多いが，全体的に見て，金井は現代と同じような基本的文法学習項目に対する認識があり，本書を段階的に基本的で学習が易しいものからより複雑で難しいものへと配列しようとする意図があったと考えてよいであろう。

## 4. 『日語指南』と『甲種日語読本巻1』

『甲種日語読本巻1』は，『日語指南弐』が刊行されて約2年後に出版された。金井の手になるこの2種類の教材を比較して，何が相違し，また何が継承されているのかを比較検討する。構成内容の面で最も大きな違いは，中国語の対訳を付している『日語指南』に対し，『甲種日語読本巻1』は日本語の本文だけで構成されていることであろう。また，前者は後者にはない発音の課を4課から13課まで設けている。中国語母語話者に問題

となるナ行とラ行(ハナ—ハラ)，清音と濁音(ハタ—ハダ)，日本語の特殊音素である撥音・促音・長音，ガ行鼻濁音，そしてアクセントまで取り上げていることが，大きな特色となっている。文法上でも，「早いの人，遅いの牛」(弐3課) など誤用例をあげるなどして，中国語母語話者の陥りやすい問題点を説明している前者に対し，本文だけで構成されている後者にそうした項目や説明はない。また，前者はその課の主な文法学習項目の用例文の前に，関連語彙があげてあるが，後者は文単位の本分だけで構成されている。前者の用例文はほとんどが関連なく列挙してあるのに対し，後者の場合，多くの課が対話形式をとっており，文型提出には場面や話題からくる制約があり，工夫が必要となる。しかし，4級文法学習項目は83%と84%で両者ともほぼ同じであるが，3級は59%と71%で後者のほうが多様な文法学習項目を配している。これは共同作業者や協議会での意見の反映ということもあろうが，2年間の日本語教育の実践経験からくる金井の文法観・教育観の変化，成長と見ることができよう。

その他両教材の表記の面の特徴に触れておく。『日語指南』が拗音の表記を「いっし-ょ」のようにハイフンを入れたり，初めのほうの課では「コレ　ワ　メイシ　デス」のような短い単位の分かち書きをし，助詞「は」を初めの段階では「わ」と表記するなど表音式を用いるが，14課以降歴史的仮名遣いに変え，分かち書きの単位も「コノホンハ　イッサツ　イクラデスカ」のように長い単位に変えたり，日本語の例文を片仮名と平仮名を課ごとに交互に変えて，双方の仮名を習得しやすいようにするなど，いくつかの新しい工夫がその特徴となっている。『甲種日語読本巻1』もその工夫のいくつかは踏襲されている。全体は1課から47課と，48課から73課に分かれており，後半には各課にそれぞれ題がついている。前半は1課から6課までは片仮名であるが，7課からわずかの例外はあるが課ごとに平仮名の課と片仮名の課が交互になっている。前半は発音に近い表音式をとっており，「ぼーし」「ましょー」のように長音は「ー」で示したり，「といふ」を「とゆー」，助詞の「へ」を「え」，分かち書きも前

半と後半は『日語指南』とほぼ同じように切り方を長くしている。しかし，後半ではそうした表音式を当時の通常の表記法である歴史的仮名遣いに直している。51 課からは，分かち書きそのものもやめ，普通の書き方にしている。表記においても，『日語指南』は日本語の正書法を習得しやすいように工夫が見られるが，『甲種日語読本巻 1』ではそれが一層徹底され，より習得しやすいように段階的配慮がみられるのである。

明治期の語法型教材で『日語指南』以前に作成された教材である，1900 年(明治 33)刊行の『台湾適用会話入門』に採られている文法学習項目が 4 級 52%，3 級 18%，全体 36%，1902 年(明治 35)刊行の『東語初階』が 4 級 62%，3 級 31%，全体 47% であることを考えると，『日語指南』がそれ以前の日本語教材と比べ，格段に多くの文法学習項目を盛り込んだ日本語教材であることがわかる。また，中国人母語話者の誤りやすい発音や文法上の問題点を指摘したり，表記の面でもいくつかの工夫が見られるなど，編纂者の質の高い実践的教育経験者としての特徴をうかがうことができる教材である。そして，2 年後に金井が中心になって作成された『甲種日語読本巻 1』は，より多くの基本的文法学習項目が採られ，多様な表現形式が学習できる教材となっており，明治期の日本語教材の中で，最も優れた教科書の一つとなっている。この 2 種類の教科書は，日本語教師としての金井保三の非常に優れた資質を示しているということができる。

**参考文献**

諸星美智直 [2000] 「解説」『日本語文法研究書大成　日本俗語文典全』勉誠出版
吉岡英幸 [1999] 「明治期の日本語教科書の「文型」」『日本語研究と日本語教育』明治書院